

羽田、増便へ前進

都心上空飛行で自治体と合意

国際線旅客5割増

20年めど

羽田空港の発着枠が2020年の東京五輪・パラリンピックの前に年3・9万回増える方向が28日、固まった。都心上空の飛行ルート採用を関係自治体が了承した。いまある滑走路の使い方を工夫して、増大する航空需要に対応する。国土交通省は羽田の国際線旅客が現行の1・5倍の1964万人に増え、経済効果は年6500億円になるとみている。

国土交通省は14年に成田空港に、都心上空を港を含めた首都圏空港の容量を1割ほど増やす案をまとめた。羽田は離着陸する航空機の飛行ルートを変えるのが柱だ。いまは主に東京湾上空を飛



南風時は都心方面から着陸する

国交省は28日に開いた自治体との協議会で、住民から懸念が出た騒音や安全への対応策を示した。当初案より飛行高度を上げたり、静かな飛行機を増やしたりする。東

主要都市の空港の年間発着回数

ニューヨーク	118万
ロンドン	107万
成田+羽田	75万 →83万
上海	66万
ソウル	46万
香港	40万
シンガポール	35万

(注)国交省資料

え、東京五輪の前に新たな必要経費を盛り込む。3年ほど工事を終え、東京五輪の前に新たな必要経費を盛り込む。3年ほど工事を終

都市間競争 世界で激化 訪日客受け入れ 成田の活用が課題

国土交通省が首都圏空港（成田・羽田）の機能を強化するのは、グローバルな都市間競争が激化しているためだ。2空港の容量はすでにアジアでトップクラスだが、就航都市数や国際旅客数では見劣りする。

利便性が高い羽田空港の国際線を増やして、東京の都市としての魅力を高める。成田空港は格安航空会社（LCC）重視旅客数は現行4000万人に増やせる。成田の国際線は第3旅客ターミナルビルをLCC専用施設にするなどアジアからの誘客に力を入れる。訪日客の受け入れ環境整備には成田の一段の活用も欠かせない。

な運用を始める。羽田の年間発着枠は現行の約45万回から49万回に増える。国交省は増えた分を乗り入れ希望が多い国際線に割り振る。昼間時間帯の国際線は年6万回から9・9万回に増える。国交省の試算では国際線の旅客が705万人増え、うち外国人が294万人を占める。

都心に近い羽田空港の発着枠が増えると、都内から海外旅行や海外出張に行きやすくなる。羽田

日本航空も「首都圏在住の人だけでなく、日本各地の人、訪日外国人の国内各地域への流動に資す

は地方空港とのネットワークも充実しており、地方から乗り継いで海外に行くのも便利になる。大手航空会社も羽田の容量拡大を歓迎している。全日本空輸の篠田修社長は28日の協議会を受けて「成田・羽田と海外を結ぶ国際線の路線拡充に積極的に取り組んでいく」とのコメントを発表した。

「容量拡大の検討を始めた」という状況は一変した。今回の容量拡大は必要最低限だ」と指摘した。成田国際空港会社や国交

省は成田空港の3本目の滑走路増設なども検討している。

入程度と、シンガポールの5400万人や香港の6300万人と比べて少ない。国際線の旅客数を増やすには容量拡大が不可欠だ。羽田の国際線がさらに増えると、成田の相対的な魅力は低下する。成田は第3旅客ターミナルビルをLCC専用施設にするなどアジアからの誘客に力を入れる。訪日客の受け入れ環境整備には成田の一段の活用も欠かせない。